
魔王と魔女

黒手袋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と魔女

【Nコード】

N2199D

【作者名】

黒手袋

【あらすじ】

中学校を卒業して、高校の入学式を明日に控えていた主人公、西岬亮。散歩がてらに、立ち寄った学校で魔女と自称する少女と出会う。その魔女が亮に向けて放った言葉とは？そして、新しく始まる学校生活の一番最初で出会う人物とは？あまり期待しないでください……

くプロローグ・全ての始まりく（前書き）

ファンタジー物だったり、青春物だったり、高校生活物だったりする、今一まとまりの無い小説です。プロローグですが、一生懸命書きましたので、「みてやるか。」程度でいいので見てみてください。

くプロローグ・全ての始まりく

プロローグ

春。

あれだけ寒い寒いと呟いていた冬をとくに通り越し、俺の家の庭に植えてある桜の木にも、桃色の蕾を芽吹く時期になった。

明日、高校の入学式を迎えている俺は、とくに明日の準備を終えて明日を待つばかりになった。しかし、今やるべき事とはなく寝るにはまだ早い。正直、暇であった。

俺は今まで座っていたベットから腰を上げ、散歩に行こうと思いつつ、中一の頃から外出時には必ずと言っていいほど身につけていた、黒のロングコートを押入れの中から引きずり出し、それを身に着けた。中一の時母親から貰ったのを初めて身に着けた時は膝の下までであったロングコートも今では膝の上までになってしまった。我ながら成長したなと思いつつ、俺は家を出、中学校へ向けて自転車を漕ぎ出した。

外は若干暖かく、過ごしやすい気温といえばその通りだった。小春日和という言葉があるが、これは晩秋から初冬かけて使う言葉。だとしたらこの場合は小秋日和となるのだろうか？恐らくないだろうと思うが、

用語・小秋日和。考案者、俺。

なんてしてみると、格好よく見えるような気がする。・・・そんなわけではないか。

そんな事を考えつつもふと立ち寄った商店街。幼い頃よく散々に汚れるまで遊んだ公園。俺が中学生の頃に通学路として通った住宅街。それ全てが小さくなって見えた。そして辿り着いた俺の母校。中学生の頃は何度も見ていた場所のはずなのに、今見てみると別の

場所にしか見えなくなっていた。短い時間だが、見なくなってからもう一度見返すところまで見違えるのものなのだろうか？それとも自分が人間として大きくなった事によるものなのだろうか？

人間時々、とても不思議な出来事に出くわすことがある。自分の住んでいた世界がいつもよりも小さく見えたのはそれと同じようなものなのだろう。と言う勝手な解釈をしながらも、俺は中学校の生徒玄関前に立っていた。時計は午後六時を指していたが、玄関の扉の鍵は開いていた。それに、職員室にはまだ先生が残っているらしく、電灯が点いていて明るかった。俺は、躊躇無く学校の中へ入り込んだ。

学校の中は職員室しか電灯が点いてないせいか薄暗く、正に夜の学校というイメージを出してなくもなかった。

俺は体育館から、俺が部活動の頃に使っていた部室、俺が冬にある人間とまたいつか出会うことを約束したベランダにかけてまでそこで起きた出来事を思い出しつつも、回って歩いた。この学校に入り込む前までは教室は一番最初に通ろうかと思っていたがやはり最後にすることにした。なんせ、一番思い出が残った場所には最後に通ったほうがなんとなくいいような気がした。そんな根拠も無く適当な事をさっき言ったなと思いつつも、俺は俺が存在した教室がある廊下に着いた。

しかし、俺が存在した教室だけおかしかった。というより、不自然だった。他の教室は電灯も点いてなく、とても暗い。でもその教室だけが明るかった。その教室を学校生活での住処としていた俺たちが卒業した以上、生徒は誰もいないはずだったが俺は先生がそこにいるのかと、ふと思った。だがその教室に近づくに連れて、その教室の明るさは電灯が点いているような明るさではないことに気がついた。まるで車のライトが教室を照らしているかのようだった。遠くで見てもわからないが近づいてよく見てみると、変わったことに気がつく時がある。これもその一貫かと思いつつ、教室を覗き込んだ。教室から放たれている眩しい光に半ば目が眩みつつも、その

光の根源を探した。

すると、そこに存在したのは俺と同じくらい、もしくは俺以下の歳をしたように見える、ロングコートを着た少女が存在した。何色のロングコートを着ているかわからなかったが、光で眩しいせいかそのロングコートは白色をしていた。俺は光の根源が少女であったことの驚きか、もしくはそこに見たことも無い人間が俺の学校に、しかも俺が存在した教室に見たことも無い、ましてやこの学校の生徒でもなさそうな人間が居た事に対する驚きかもわからぬまま、俺は教室に入ってしまった。

少女は俺に気付き、じろじろと全身を嘗め回すようにゆつくりと俺を見た後、呟くように言った。

「やつと 見つけた。」

俺はその言葉を聞き取ったが、何も言わなかった。そして少女はまたしても呟くように言った。

「私は 白き魔女。」

魔女？今この少女は魔女と言ったように聞こえた。俺は耐えかねて魔女に言った。

「魔女 と言ったな。ならばその魔女に聞く。何故お前はここにいる。」

「私は お前を 探していた。」

俺は眩しい光に耐えつつも、何とか会話を続けようと努力した。

「何故俺を探していた？」

「お前は 私と - 対の存在 私が 存在する

以上 - 居なくちゃいけない存在。 だから 探した。」

「対の存在？俺とお前は初対面のはずで、今こうして話しているのも初めてのはずだ。なのに、会ったこともない人間が何故自分の対の存在だとわかる？」

「お前が 黒き・・・だから。」

言葉がよく聞き取れなかったので、なんと言ったか問うた。だが

しかし、

「いずれ また会う その時に また。」

俺は少女が去ろうとするので止めようとした。しかし、少女が放っていた光がフラッシュして目が眩んでしまった。

目が眩むのが治る頃には、少女はもう居なく俺は暗い教室に一人佇んでいる状態だった。俺はその少女の行方を知るわけでもないので探すわけにも行かず、家へ帰ることにした。俺は帰り道にその少女の事について考えた、その少女の存在。魔女について。その少女が俺に言おうとしたこと。それ全てが疑問だった。しかし、この事を友人や家族に言うわけにもいかなかった。ただ一人考え込むしかない。

少女はまたいずれ会うと言って、消えてしまった。ならば、その時を待てばいい。そう考えながら、帰り道を歩いていた。

気が付くと俺は家の前に居た。無心になったり、何か考え事をしてしていると帰り道が早くなる、そんな気がしてならない。

その日の夜は、明日の入学式の事はまったく気に掛けず、あの「魔女」の事ばかり考え、寝付く事が出来なかった。

そして次の日。俺は寝不足でフラフラになりながらも、俺が入学する学校へと自転車を漕ぎ出した。入学する高校と中学校は大して距離は無く、中学校の頃は自転車通学が学校から家が離れている生徒にしか許されてなく、俺は徒歩通学だったので、今回の場合は、中学校の登校よりも格段と時間が短縮された。

俺は一年の駐輪場に自転車を置き、新しく入る学校の生徒玄関へ足を進めた。生徒玄関にはクラス分けの表が張り出されてあるらしく、入学したと思われる新生徒がそこに集まっていた。俺は自分のクラスと自分の教室の場所を確認し、学校へ入った。

俺は迷う事も無く、教室へ入る事が出来た。

教室の扉を開けた瞬間、教室の中に居た生徒が何人か俺を見たが、視線を空へ戻した。俺の登場に気付いた友人、火塚《ほづか》は俺をこう呼んだ。

「おい。ニッシー。」

そう俺を呼んだ火塚は俺へ近づいてきた。ちなみにニッシーというのは俺のあだ名で、俺の名前、西岬《にしのみさき》から取って作られたあだ名だ。

あだ名の由来はともかく、大声で言われた俺のあだ名を聞いた生徒が笑うのを見つつも、俺は火塚に言った。

「そのあだ名はこの場所で言うべきじゃないと思うのだが・・・。」

「まあ、気にすんなよ。それに西岬っていう名前自体が長いから呼びにくいんだって。」

「そうかそうか。で、それはもういいとして用件は何だ？可愛いお前好みの女子でも見つけたのか？」

俺は本当にどうでもいいように火塚にそう言った。

「ん？ああ、俺好みってわけでもないんだがな、可愛い子がこのクラスに居たのよ。」

「ふーん。その子はどこに居るんだ？」

冗談めかしく、俺は聞いた。

「ほれ、そこに」

俺が指した指の通りに向いた先に居たのは

「魔女」だった。

「プロローグ・全ての始まり」(後書き)

初書きです。初心者です。難しいです。大変です。これだけ書き上げるのにものすごく時間がかかってしまいました。ものすごい長編を書き上げる事が出来る人達を尊敬します。えーと、とにかく頑張りました。そして疲れました。何とかして、この小説を読んでくれた(とは言ってもまだプロローグ)人・・・いや方々の期待に(期待してくれる人が居れば)添える事が出来るよう頑張りたいです。以上、黒手袋でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2199d/>

魔王と魔女

2010年11月27日23時30分発行